

## 平成24年度 第2回 英語学教育FD/ICT活用研究委員会 議事概要

I. 日 時：平成24年8月1日（土）14：00～17：00

II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局会議室

出席者：山本涼一委員長、田中宏明副委員長、北出亮委員、山本英一委員、  
五十嵐義行委員、西納春雄委員  
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、松本職員

III. 検討事項

1. 本日の記録担当者選出

2. 第1回委員会の議事録確認

議事録の作成については、議論の過程を明らかにするよう、要請があった。

3. 学士力実現に求められる教育改善モデルの検討

事務局より資料説明。本日は、「英語学教員の教育力」のうち、以下について検討する。

【2】教育改善モデル実現に求められる教育力

【3】教育力を実現するためのFD活動と大学としての課題

(1) FD活動

(2) 大学としての課題

### 【2】についての議論

委員長から資料③の原案（以下、「たたき台」）が提示された。事務局より、カリキュラムの全体像と改善モデルの位置づけを確認して教育力を議論してほしいとのコメントがあった。社会学、政治学、コミュニケーション関係学のモデルなどが参考になる（「参考3」）。

以下、議論の概要。

- ディプロマポリシーなどには言及しなくて良いか。他の学問系のモデルは、学士を卒業させるモデルである。英語は学問分野とは異なる。
- 英語は教養科目、他の科目との連携を念頭に置く科目である。英語の場合にはこの点を明確にすべきであろう。
- それぞれの学部学科のディプロマポリシーに沿った英語教育という表現の方が良いのでは。「参考3」の経済学が参考になる。
- 大学の事情によって、英語科が主体的にカリキュラムを設けることができる場合と、学部の意向を強く受けたカリキュラムを設ける場合とがある。
- 「英語教育における教育改善モデル（その2）」（資料②.2）は工学部との協働カリキュラムである。このほかビジネス系（商、経営など）は独自色が強い。その場合には、学部学科によって英語カリキュラムがつまみ食いされうる。
- 大きく立ち返ると、大学がどのような卒業生を育てたいかが原点となる。その上にディプロマ、カリキュラムポリシーがある。

- 大学の理念は言わずもがなであるので、言及する必要はないのでは。

文案作成：【2】の改訂

カリキュラムに反映された教育理念を十分に理解した上で、当該授業の位置づけを相互に共有し、協働して授業を実施、工夫・改善できること。

これを改訂版【2】①とする。

#### 「たたき台」【2】①（改訂版【2】②）以降についての議論

- 授業設計ができることは非常に重要。多様で効果的な授業ができることも。
- 他の専門分野とのコラボを可能にするような教育力はどのように記述されるのか。
- 新しい教育環境を作ることではないか。「たたき台」【2】④で述べている「協働学習の設定」「グループ学習の設定」をまとめるのが良いのでは。
- 授業の設計が全ての根本になる。建築で言えばデザイン、設計に当たる。どのような家を建てるのか、これができないと前に進まない。
- 「参考3」のp.5、物理学、教育学の【2】が参考になるのでは。
- 家を建てる前に、どのような地域に住むか、どのような町並みを作るのか、そのような「教育環境」、つまり専門と語学があいまつ環境の説明が必要ではないか。
- 英語と専門分野の関連については、実践的な英語能力が身につくための協力を得られるのが良いのではないか。基礎能力の定着と実践的運用能力の定着を同時に謳えないか。「資料②.1」2.1 授業のねらい参照。

文案作成：

【2】② 専門分野と社会との協働を通じて、英語を実践的に活用し、社会活動に参画できる教育計画をつくることができる。

- 詳細については、「参考3」のp. 5、物理学、教育学【2】③が参考になるのでは。
- 協働教育のマネジメントを行い、学生に主体的に学ばせることがキーワードになるのでは。
- 「参考3」のp. 3、心理学【2】④が参考になるであろう。

文案作成：「資料②.1」の2.3②を参考にする。

【2】③主体的な学修を実現するために、グループダイナミックスと相互評価を組み合わせることで効果的な授業マネジメントができること。

- 「資料②.2」の2「専門分野をグローバルな視点で理解できるようにするため…」を活かすような方策は？
- 英語を活用する場合には、国内外の垣根は意味がないので、「海外で通用し」のような表現は必要ないのでは。「教育改善モデル」実現のための教育力なので、それに限定して考えたい。

文案作成：

【2】④ 社会で活用できる実践的能力を身につけさせるため、対等の立場で専門分野の教員と役割を分担し、到達目標を提示することができる。

文案作成：ICTを含んだ教育力について。

【2】⑤ ICTなどを活用して教員・学生間のコミュニケーション、適切な教材作成、eラーニングの指導ができること。

#### 「たたき台【3】」についての議論

- 教育力を実現するためのFD活動を可能にするためのからくりを提示する必要がある。
- 大学によりFD活動の取り組みは様々である。授業公開、研修会、インストラクショナル・デザインの専門家からのアドバイスなど、様々な方法とレベルで改善を図るのが良いであろう。英語の特殊事情として、非常勤講師へのFD活動、意思統一などの困難さもある。

文案作成：

##### (1) FD活動

- ① 大学の社会的責務と役割を十分に理解し、定期的な授業公開および研修会等を開催し、授業改善に組織的に取り組む必要がある。
- ② 社会や他学部の教員と定期的に意見交換を行い、英語を実践的に活用するカリキュラムデザインおよび教育方法の研究会を通じて改善イメージを公表させる。
- ③ 学内外の専門家を招聘し、教育方法、教材作成等の指導を受ける研修会を設ける必要がある。
- ④ ティーチングポートフォリオや学生による授業評価などから、第三者による適切な評価・助言を受けて授業改善につなげる仕組みを設ける必要がある。

##### (2) 大学としての課題

- ① ICTを活用した教育手法を支援する体制を構築する必要がある。
- ② 大学内外で意識を共有化し、教育方法、教材、評価方法・基準などのデータベースを整備する必要がある。
- ③ アドミッション・カリキュラム・ディプロマのポリシーに沿って、教員が行う主体的な取り組みを人的・財政的に支援・推進する必要がある。
- ④ 世界に通用する英語教育の質保証を持続的に行う必要がある。

#### 4. 今後の検討スケジュールについて

第3回委員会開催予定日時:平成25年8月27日(月)17:30-19:30を予定。

以上